

毎月一回15日発行 昭和52年4月15日発行・第87号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

リベルテール

4月号



The Wrestlers

Libertaire Vol. VIII. No. 5

無 政 府 主 義 誌

昭和52年4月15日発行
第87号
第三種郵便物認可

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

人類更生の大道アナキズム研究書

何が私をこうさせたか	金子ふみ子獄中手記決定版	2,400円
解説：瀬戸内晴美	金子ふみ子歌集	500円
権藤成郷著作集2	農村自救論・日本農制史談	3,000円
大杉栄秘録 増補	堀保子ほか19氏著	1,000円
無政府主義論	エンリコ・マラテスタ著	300円
ディナミック	石川三四郎個人紙復刻版	3,000円
アナキスト革命	ジョージ・バレット著	150円
西洋社会主義運動史	石川三四郎著	1,000円
ロシア革命の批判	Aベルクマン著	200円
黒色青年	黒色青年連盟機関紙 大正15年 創刊号より昭和6年終刊号まで復刻	2,500円
黒色戦線	アナキズム文芸思想誌 第1次 昭和4年創刊号より終刊号まで復刻	5,000円
労働運動第5次昭和2年復刊号より終刊号復刻 差別とアナキズム・水平社運動と		<近刊>
アナ・ボル抗争史	宮崎晃著	1,600円
君民共治論	権藤成郷著作集第3巻	3,000円
無支配への道	マラテスタ著作集1	300円
アナキズムのABC	ベルクマン著	100円
古事記神話の新研究	石川三四郎選集1	2,200円
<解説・石川三四郎論 大沢正道>		

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田 電0270-24-0776

郵便振替口座 宇都宮 11015 黒色戦線社 大島英三郎

東京事務所 電03-735-1246

〒144 東京都大田区西蒲田7丁目61番8号エンリコビル4階
国鉄蒲田駅西口下車、蒲田銀座アーケード街歩いて5分突き当り
左隣、毎月第2、第4日曜午後1時より4時共学読書会、初心者に公開

販売書店 東京、神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・
早稲田文獻堂・京都、中・寺町二条上・三月書房

■ リベルテール Le Libertaire

■ 1977年4月15日発行 Vol. VIII No. 5

■ 編集兼発行者 三浦精一

■ 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替東京133830番 三浦精一

今月の言葉

落紅不是無情物
化作春泥更護花

(訳)

花は落ちてても
無情じゃないよ
春先の泥にもなつて
花を護るよ
——劉師復——

Luòhóng búshì wúqíngwù
Huàzuò chūnní gèng hù huā.

新ソーレン節

ヤーレンソーレンソーレン
ソーレンソーレンソーレン
二〇〇カイリをカモメに問えば
わたしや立つ鳥エエ波に聞けチヨイ

日本政府よ 覚えているか
ミグを売ったはエエどこの誰

領土問題棚上げすれば
ニシン・サケ・マス呉れましょかね

どこの政府もやることも同じ
見栄とおどしでエエ勝負する

情ないぞえシバレル海よ
魚とりたしエエまならぬよチヨイ

目次

巻頭言

原価をめぐって 損 悟 空 1

リベルテール誌に寄す 関 正 2

中国無政府主義試論 (1) 劉師復 志 麻 達 夫 3

「ダイナミック」総目次と解説 三 浦 精 一 7

読書から

「戦後日本における貧困層の創出過程」

アメリカこぼれ話 ハ ギ シ ン 8

「直接行動」読者会訪問記 11

一 波 万 波 12

野 火 14

アアーサーモイゼが送ってくれたH・G・ブルゼス
カー (Hrri G. Breska) の彫刻 (写真) で題は
「レスラー」。ブルゼスカーはアナキストとして
スペイン内戦時に戦死しました。一九一五年のこ
とで24才でした。

原価をめぐって

損 悟 空

大分前に大門一樹氏が「原価の秘密」や「盗奪の論理」を書かれた。大企業がどれだけ低原価で莫大な収奪を行っているかを分析したもので、コンシューマリズムの一助になった。

戦後、大田区雪ヶ谷で佐藤陽一氏が、ペーパーコンデンサの小工場を経営されていた。玄関に日本アナキスト連盟の看板をかけ、「税務署もこわがって来ないよ」と笑っていた。だが税金を取られるだけの収入もなかったのだ。東芝小向工場の専属だったが、納品しても何か月も支払がない。やつと通知がきて行ってみると、先付小切手で分割だ。とうとう彼の工場は潰れてしまった。

また十数年前、東京の小さな電気釜メーカーが、特許権を東芝に買いとられ、東芝のマークで下請となり、しまいに捨てられた事実がある。埼玉県越生のコッス測定器は、日立製作所の資本と技術援助で発足し、製品を安く日立に納めていた。だが不況になると日立はサッと手を引き、コッスは倒産した。同じころ、電気冷蔵庫はたしか安くても二、三万円はしていたと思う。三菱電機専属の伊丹の板金工場を訪ねたことがある。切断、折曲、打抜、溶接とすべて自動化して、匡体を組立てていた。何と冷蔵庫匡体の納入価格が六百元位なので驚いた。分単位どころか秒刻みの生産だ。停電したらお手上げなので、自家発電設備も持っていた。そして親企業のノルマに応じていたのだ。二重収奪される中小企業の例は限りが無い。

日本電子、山一証券、安宅産業等、潰れそうな大企業に金融資本はテコ入れするが、中小企業は平然と見殺しにする。昨年度の倒産は史上最高だったという。

「原価をめぐって」だ。資本主義社会はあくなき利潤追求であるから、この不況下では原価低減が、利潤をたもつ大きなきめ手となる。どこの企業も、どうしたら十円でも廿円でも安くできるかに躍起になっている。そのシワよせは労働者にくる。設備の合理化、設計の単純化・標準化、代替材料使用など、色んな手段があるが、一番手っ取り早く狙われるのが人件費の圧縮だ。このためトカゲがシッポを切捨て逃げないように、臨時工をクッションにしたり、首切りや労働強化をしたりする。

だが中小の労働組合はトコトン迄闘えない。闘えば泥沼状態になって逃げ出したり、組合が割れたりする。企業あつての組合という意識が底にあるからだ。戦前からの年功序列・終身雇用という労務政策は一朝一夕に崩れないが、この打破を目標にしなければ、階級意識は出てこない。

三浦精一氏のおすめで宗教とアナキズムについて本誌にいささか私見を述べておきます。わからないところは毎週火曜新宿三光町の「月ノ輪出版」での会合で説明をいたすつもりですから一読して下さい。

※ ※ ※

昨年中国では指導者の二人——毛沢東、周恩来が逝去し、にわかに新しい顔の華國鋒が出現し、彼地のジャーナリズム、雑誌及び日本の各新聞紙上にも伝えられた。そして、四人組（江青婦人を含む）も明らかにされた。私はこれらの報道をすべて信じないが、ある程度明らかになったと思う。

中国には昔（隋代）に偉大な宗教思想があったが、敢てそのことと現代の中国の思想とを比較することにした。扱、日本にも普及した天台宗、華嚴宗の教義が確立されたのが隋代（五八一—六一八）で人も知る京都比叡山の宗教について、ルグルス文庫（星の名）の「天台哲学入門」（新田雅章著）に次の解説がある。アナキズムの理解とあわせて読んでいる。バクーニン、クロボトキン、スチルネルの思想と仏教とを比較して研究の素材として

いる。

以下前記の著書からの引用である。ところどころ省略し、おしまいの方もちめて一部だけのものである。

「天台宗という一般に伝教大師最澄を想起し、比叡山延暦寺を連想する人が少くない。最澄にしても、比叡山にしても、天台宗に縁ある人物であり、場所である。しかし天台宗は中国の隋代に成立した仏教の一派で、最澄を介してわが国に伝えられ、宗派として独立した。従って歴史は隋代以前に遡って眺める必要がある。教学思想はその時代に体系的になった。

教学思想が天台という名で呼ばれるのは、大成者の智者である智顗大師が、中国の天台山に居住して、修行に つとめ自ら思想を練り上げたのである。その思想は華嚴宗と共に中国仏教の二大高峰と称されるほど壮大である。その壮大さは他に類を見ないほど、悟りへの方途を教示し、実践体系を用意する特徴的な構成で彩られている。

天台の僧智顗という方の示したことは組織あり、構成を有してその全貌を把握するのになかなか至難である。この本は智顗の思想の全体を視野に収めているわけではないが、重要なことが書かれている。：天台大師智顗（五三八—五九七）の登場を待つ六世紀の前半、中国仏教の思想的展開の上から見て、仏教諸経論の翻訳が出そ

い、その解釈、研究は相当進行して、仏教の中国化が成熟し始める時代である。六世紀前半、仏教の思想的展開史の上からみると、仏教諸経論の翻訳が出そろい、その解釈、研究は相当進行し、仏教の中国化が成熟しはじめた。この世紀に仏教の中国の地への定着が進行した背景は諸条件の重なりがあったが、地味で持続してきた。

また仏典の翻訳事業が大きい意味を持ってきたことも指摘せねばならない。パリー語、サンスクリット語の仏典が中国に入り、天台大師の教学思想と経典の系譜は接続するのかわという問題を知る上から、はじめに経典の翻訳の歴史を長く述べなければならない。その経典名は、後漢末の安世高と支婁迦（カ）の活動によってなされた。前者は「四諦経」「転法輪経」「八正道経」「大安般守意経」「陰持八経」等の小乗の訳、支婁迦識は「道行般若経」「般舟三昧経」「首楞嚴経」等の大乘経典の翻訳を世に送った。つぎに東晋の五胡十六国の地に訳出経典が確立した。北方の前秦には、学者の僧伽跋澄、僧伽提婆、曇摩難提、曇摩、僧伽羅叉等が渡来し、阿含の諸経典毘曇の論書をもたらしした。そのほかの戒律書は曇摩持が訳出した。こうして小乗の毘曇の経・律・論の重要なものがもたらされた。そして毘曇研究の資料価値が固められた。そのご羅什の訳経事業は七十四部三百八十四巻と

もいわれ、諸経典——「般若経」「妙法蓮華経」「維摩経」「阿弥陀経」「首楞嚴経」「梵網経」「遺教経」「坐禪三昧経」等の諸経典、それに「中論」「百論」「十二門論」「十住毘婆沙論」「成実論」の各論書を挙げる事ができる。それぞれ重要な大乘経典で、この訳出で中国の仏教は飛躍した。」

※ ※ ※

三月八日、新宿「月ノ輪出版」で三浦さんばかりリベルテールの仲間数人とお話をして気づいたことで、世にいうアナキスト諸君にいささか参考として書いた次第です。

中国無政府主義試論 (1)

志 麻 達 夫

中国のアナキズムは「無政府主義」(Wú Zhèng fǔ zhǔ yì)と呼ばれ、漢字表記のおかげで、われわれは字面でアナキズム「安那其主義」を指すのだと理解できる。しかもその意味内容、概念はわれわれがそれによって規定する範囲とほぼ同じで、これは中国のアナキズムがいわゆる、中国文明の近代化の過程で獲得された思想であり、その成り行きは、明治社会主義の範囲で、われわれが獲得したものと同じだからであろう。

しかしまたこうも言えよう。中国の思想の中には、本質的にアナキーなものがあり、それは老子や諸子百家に認められるのだ。だとすれば、この近代無政府主義は、クロボトキンの思想と交差するにしても、その現われとしての師復主義（劉師復の唱えた無政府主義）は中国の風土に生まれた独自のものかも知れない。

ところで中国人にとっての近代化とは何であつたらうか
康有為の「変法」は西欧の文物の輸入と制度の改革であつたが、思想的には、

1. 自我の自覚

※

2. 因果関係における思路（理路）の獲得

3. 民族の独立と近代国家の創出、であつた。

そこで通常「読書人」や「文人」と規定される中国の知識分子（インテリゲンチヤ）にとつて、民主主義、無政府主義、ボルシェビズム、マルクス主義等は近代思想（ノエマル作られたもの）として思路であり、それによつて「治國平天下」^{チコクヘイテンカ}、國を治め天下を太平にする世界観、人生觀と受けとられている。

＊陳秋白（チー・チュンパイ）によれば「：当時私は廿一・二才で、いわゆる人生觀形成の時期にあつた。理知的方面ではトルストイ式の無政府主義から

すぐマルクス主義に転向した。これも人生觀または主義で、つまり一種の思想方法である——いわゆる思路（理路）だ。一度この思路を歩きたすと、容易には改変できないのだ。ところでマルクス主義とは何か。それは無産階級の宇宙觀と人生觀である。：」（参照・多餘的話）

とある。彼は李大釗のあとで党を指導し、一九三〇年代に、中共中央の領導権をめぐる党内闘争に破れ党を離れソビエツト地区で働き、一九三五年五月、国民党により処刑された。

本稿の記述方法（現象学的記述）

一般に自然現象の事実を収奪して、そこに一個の法則性を認めテーゼをたてるのは帰納として科学的方法である。これに対し、現象学的方法は記述されている事柄（現われ、表象）を「現われ」として、そこに――

1. *essentia* 本質があるとする

2. 「現われ」（表象）がすべてである

3. 「現われ」は記述者の任意の解釈に委ねられるのではなく

4. 別の「現われ」と関係づけ、照合し、相互に对照、比較、考量することで狭い主観から脱却する

5. 次に記述者の主体の介在によつて、単に事実の寄せ集めや、純客觀的装いも併せて脱却することができると考える

（例）「無政府主義は、無産階級の科学的社會主義に敵対する、小資産階級と流亡的無産者の社會思想である。」（無政府主義の幾つかの刊行物――五四時期期刊介紹 212頁）

この一文に接して「a.それはセクトからの發言である。b.中傷惡罵である。c.事實無根である。」等の判断を停止する。（エボケ）

次にこれを發生源に戻す（還元する）と――

社 会 政 治 思 想	
無 政 府 主 義	科 学 的 社 会 主 義
小 資 産 階 級	無 産 階 級
流 亡 的 無 産 者	ボ ル シェ ビ ッ キ
(知 識 分 子)	(中 国 共 産 党)
工 会 運 動	職 工 運 動
(サンジカリズム)	(党 主 導)
個 人 主 義	大 衆 主 義
自 由 連 合 組 織	中 央 集 権 組 織
無 政 府	有 政 府

の図式を得る。そこで両者の間には平行な何らかの友好的または非友好的関係のあることが判る。故に本稿の記述者はこれを方法論として採用することで、単なる歴史的資料の掘くつや断章取義、語義の詮索から免れ、中国無政府主義とその運動が本来的に何であつたかを明らかにし、それが現在のわれわれにどんな関係をもつかをみることにしよう。取扱う範囲は一九一〇年―一九二五年だが、これは中国側の資料が言う無政府主義の活発な時期に対応する。読みつき語りつぐ経過の中で、取りあげる主義者の活動や一つの運動の及ぼした影響によってはこれを外づれる場合もある。

それにしても中国に於ける無政府主義の影響は大きい。「毛沢東同志の青少年時代」^{（三編）}述によれば「この頃（毛沢東が北京大学図書館の補助職員になり勉学していた一九一八年代）同志は無政府主義の宣伝小冊子を何冊か読んだ。非常に短期間ではあつたが、当時の中国の多くの青年達と同じく、その影響を受けた。しかし間もなく、科学的共產主義がそれにとって代つた」とある。これで毛沢東がアナキストであつたとの理由にはならないが、一九一七年彼が家郷で創設した討論グループ「新民学会」の約定では人品行を正しくし、學術研究をすすめるVのを旨とし、更に会規では賭博をしない、遊技

になれ親しまない、なまけないVへ不賭博、不狎妓、不懶惰の条文があるという。それなら、一九一三年八月二〇日から刊行された人民声Vの提唱する心社の規定に副うものであり、現在の八三大規律・八項注意Vまで継承されている倫理は、当時のものに源泉をもつと考えられないだろうか。

本稿では中国共産党のいう、無政府主義者との人死我活的思想闘争V（お前が死んで私が生きる闘争）に重点を置くより、むしろ師復の言っているように主義者達が何を「花」とし、そして泥になつて何を護ろうとしたのか、これが語学のハンディを省りみず敢て本稿を起す理由である。

＊表記は原文を引用するのが印刷上むづかしいので私訳を用い、所在を摘記し、慣用の人名、語句は安那其ーアナキー、克魯泡特金ークロボトキンとする。

I 劉師復（Liu Shi-fu 一八八四—一九一五年） 資料1

劉思復（後に師復と改名）は広東省香山県の人である。幼くして聡明で学を好んだ。十五才で童子試（清朝時代の制度で府州県の学校に入学する試験）に応じ、博士弟子員（博士官の弟子—候補生）になった。当時国内には

新しい言語学者が八股文を排斥し、これを亡国と文弱の原因だと指弾した。思復はこれを聞いて大いに感動し遂に学業を放棄した。専ら科学と算術を研究して、得心するところがあった。一九〇二年、同郷の士、徐桂と兄の機杭（ユエハン）と一緒に演説社を、石岐城という所に起した。そして改革を提唱し、それに賛同するものが少くなかった。また女学堂（女の学校）を開き、郷の紳士連中が猛烈に反対するのを顧りみなかった。なお毅然として社会の改良と女学の振興をもつて自分の任務とした。一九〇四年、日本に留学し、漸次革命党の人びと（孫文派）と交流し、光復事業（排滿清朝打倒）に志を持つようになった。一九〇五年孫総理（孫文）が欧州から日本に来て、東京に中国同盟会を組織すると、思復も名簿に名前をのせ参加した。横浜に移つて、惠州の人李植生につき炸薬の製造法を学んだ。一九〇六年夏秋の間、孫総理は広東で行動を起すことを決意したので、広東出身の留日学生が前後して帰国し、工作者は数十名となり思復もその中の一人だった。時に香港に新聞があり、これを東方報と改名した。謝英伯と陳樹人が編集にあたっていたが、思復が香港に来ると謝、陳等と共に力を尽して記事を選んだ。やがて安懷女学堂の教員であつた丁湘田と婚約した。一九〇七年春、香港同盟会機関部は軍事

部門の同志郭人漳と趙声を広東に派遣し、孫総理も許雪秋、鄧子瑜を派遣したが、潮惠での実行運動はむづかし、機の熟すのを待つこととし、ひそかに普慶坊に機関を設置し、同志を止宿させた。思復と汪精衛、廖平荃等数人が宿泊した。この年の二・三月頃、党内では潮惠での実行を速かにすべきだ。広東省知事岑春煊と海軍長官李準均は党の大敵であり、その一人を除去すれば敵の力をそぐのにあづかり、加えて党人の氣勢があがるだろうとした。そこで実行委員会を選出し任務を評議した。思復もこの志を長らく持っていたし、また爆裂弾の研究をしていたので、その実行を請けあつた。汪精衛と私（馮自由のこと）は賛成した。思復は任を委せられると、最初中国日報社の四階でひそかに炸薬をやつてみたが、試験に不便な為、宝慶坊の機関部に場所を移した。たまたま試験に失敗し、水銀炸薬で顔面に傷を受け、広東で医者にかかり、実行は一時停頓した。」

（この項つづく）

『ディナミック』総目次と解説

法学研究第四十九巻第十二号（慶応義塾大学法学研究会発行）に、中村勝範氏によって題名の解説に加えて総目次も掲載されている。解説はIとIIに分れIIIが総目次

である。

解説Iにおいて、三省堂のコンサイス人名辞典日本編による石川三四郎のアウトライン、重なる寄稿者氏名、発刊の動機の考察が行われている。この考察にはディナミックの中から抽出する外に唐沢隆三、北沢文武からも引用されて、動機は正しく把握されている。

解説IIにおいては、石川さんの思想的立場について、ディナミックの中から抽出して、要領よくまとめられている。皇国史観による苛烈な弾圧の下に、あのつつましやかな石川さんのディナミックが四回も発禁になった。その発禁の理由の考察は石川さんの書いたものから想像する外はない。筆者の記述には共感する。おとなしい石川さんの存在そのものにも危険を感じる官憲の細い神経が感じられる。この解説IIの結びとしてディナミック第十一号の石川さんの言葉、「今日の世界に唯一の解放運動として存在するのは、アナルシスト（非暴力個人的な）及びサンジカロ・アナルシスト（即ち革命的アナルシスト）の運動である」が引用され「石川はアナルシストの立場に立つ者であり、ディナミックはその思想を表現したものであった」と書かれている。この引用された言葉のうちカッコの中の説明は石川さんのものでなく、本文の筆者のものである。サンジカロ・アナルシストを革命

的アナリストとされたのは、多分サンジャリズムを革命的労働組合とすることから、かん違いされているのだろう。サンジャロ・アナリストは（石川さんはサンジャリズムの解説者でもあった）「労働組合員アナリスト」とも訳すべき言葉である。（この法学研究は死んだ娘の先生だった伊藤先生から送っていただいた、御厚情を深く感謝する——三浦）

読書から

「戦後日本における貧困層の創出過程」

笠山 京著 東京大学出版会

「貧困」を学問研究の対象として取上げる試みはわが国では少いが、英国だとマルサスの人口論を始め、ヘンリー・ジョージの著書など。ブルードンの「貧困の哲学」は書名だけ承知している。これが小説になればクヌート・ハムソンの「飢え」ジャック・ロンドンの「ハイーストエンド」V.G. オウエルのもなどルポール・ジャーシュ風で、大体報告の態で、わが「下層社会の研究」、ハ女工哀史Vも事実収集の意味では広くジャーナリズムの領域に含まれる著作だろう。たゞ小説となれば、効果を考えて悲惨な面だけが強調されやすく、読者のヒューマニズムを喚

起はするが、因果関係について理路がはっきりせず、従って何をどうすればよいかの指摘が少い。これに対しマルクス・レーニン主義からのものはテーゼを応用して何がなんでも唯物史観に合致させようとする。本書はその両面の害からまぬがれているが、問題がない訳ではない。つまり現代の福祉政策の見直しの視点が多分に導入されているように思われる。

「労働による消費とこれに対する再生産のバランスが破れて、階層からの転落がおこる。これが階層の不安定化をもたらす、貧困という社会的現象の発生だと考えるのが私どもの論理である。」

著者は貧困の原因として外的原因（社会制度）、内的原因（個人的原因としての病氣、傷害、死亡、離別或は怠惰、無氣力、乱雑といった原因）をあげ、これまで個人的原因に比重がかけられていたが、外的原因として社会保障が整備されれば階層転落は防げるという立場である。廿五年に亘る追跡調査（北海道上川郡和寒町、農家一三三世帯に施したもの）を要約するのは容易ではないが、農村解体の実情がグラフ、数表、統計資料で詳細に報告されている。

要点 1. 農業の後継者づくり

「戦後の民主的民法の下で均分相続が法の上では確立

したが、実際には長子相続で、その長子が嫌って他出すれば、他の者が代っている。農地をわけたのでは、共倒れになってしまうということが誰にもわかっていいるからであろう。そこで女の子は結婚し、相続者以外の男の子は被用者となって村から出て行かざるを得ないのである。親は子供を次から次へと作って、その中で健康で精神もしっかりした者を後継者にする。もし長男が後継者として合格すれば当然そうなるし、体が弱かったり農業を嫌がったりすれば、次男や三男が代わり、場合によると娘に婿をとって後継者にする。そして後継者以外のあまり者は被用者として労働市場へ出されるのである。農家は労働市場を通して二次三次産業の労働力の給源となるとともに、その後継者を選抜してゆくためにも、労働市場を通して労働力を放出する必要があるためである……」

要点 2. 農家の経営

「資本の発展が必然的にもたらす窮乏化の進行と、貧困要因の結びつきのある方が、転落をひきおこし、貧困層を創出して行くのである。その結びつきは、これまでの分析の限りでは個々の農家の遭遇する運命のようにみえる。まだそこから前向きに、農家を転落から守って行く方途は、はっきりと出て来てない。……最初の出発点となる人力農耕家（機械を導入してない農家）として第

一にやはり一定の経営規模がなくてはならない。（規模は地味水利に左右されるが、ここでは田畑あわせて三町歩という）第二に家族内に3〜4人の労働力があること。夫婦二人で幼児が多くて妻の労働力が一〇〇%農耕にふり向けられないと経営は困難である。第三に重要なのは機械化を行うための資金が、家族内に蓄積されていたか否か、具体的にはその資金を得る為に処分できる山林原野と、借入をするだけの信用の有無：現金収入に対する急迫の度合は、当然内部蓄積の大きさに比例するから、蓄積がない場合には現金収入にひかれて、日雇出稼が始まる。いづれも転落のきざしがある。日雇出稼の現金収入は結局、生活費の補充に廻って、機械化や増反になることは非常に稀である。そして日雇出稼が情性的になつて、転落の途へ農業をやめ都市に移住すること）を進むことになる。第四に農業経営への意欲である。……意欲が劣っている場合、三つの現象が結果として出て来る。第一は停滞型：機械化を行ったが、その機械を生産拡大に結びつけ得なかった場合、日雇出稼の必須条件がなくて、安易に出稼収入に走った場合、第二に子弟を進学させて積極的に職員・常用になつて、脱農化して行こうとするものである。この場合、とくに農家経営への意欲、とりわけ後継者の意志が大きな問題であった。……第三は日雇

兼業の永続化である。そして（これは）転落の途である。

要点 3. 貧困層創出過程

「農村を全体として、資本制経済の発展がゆり動かし、窮乏化させてゆく。農村では主軸たる農家の近代化、これにならんで商業工業自営業の近代化、被用者の近代化として現象しながら、階層をたえず分化分解させてゆく。この過程のどこかで、所謂貧困原因が発生すると、より不安定化した階層では忽ち、一層不安定化した階層への転落がおこる。勿論貧困原因らしきものが全くない場合にも、窮乏化の進行は階層を分解させて、最底辺の沈没層へと転落させてゆく。こうして貧困層は社会の底辺に作り上げられてゆく。…ところで社会の底辺とはその下は死だという意味で最底層なのである。…生活保障制度は救済の役割しかなくて、階層からの転落を喰いとめることは全く出来ない。被保護者は実在するけれども、被保護層というようなものは存在しない。社会の底辺は死に隣接しているという意味なのであって、生きている人間の社会の最低限という意味に他ならない。」著者は貧困に対する防衛線を貧困層を包むものとし、「この線はわが国の状況でみれば、米価の最低保障と労働者の最低賃金の保障と、非労働力者の所得の最低保障によって実現されるしかない。」と結んでいる。

商社が貿易で儲けた金で土地を買いあさり、宅地やゴルフ場に転用する陰で、国家が国益を理由に空港や自動車道路、新幹線を増設する陰で、また国際的分業論にまどわされ、農業に代え重工業を進めた中で、わが国の農業が根底から破壊され、離村のケースが増えつつあるのをこの本は数字とケーススタディで如実に示している。

(Y)

アメリカこぼれ話

ハギシ

昨冬、Nagala 哲学博士が来訪し一夜歓談した。その時の聞き書きの拙稿が、どうしたわけか蒸発してしまったので、思い出しながらここに記そう。

(その一)

何とかいう男が何とかいう本を出した。（この肝心な名のメモがなくなったので申し訳ないが）禁酒法時代を知っている上院議員、プロボクサー、ルンペンその他五百人にインタビュして、当時の状況を描き分析し、現代と対比したもので、新たな「ドキュメント史法」として大評判になっているという。

(その二)

ベトナム反戦運動がもりあがり、アメリカの青年達は

「これ以上資本家に儲けさせるな」と一丁羅のブルージーンズをボロボロになるまではき通した。事情を知らぬ日本の若者は「カッコいい流行だ」と猿マネを始めた。「アホかいな」とヤンキーズは笑っているそうだ。

(その三)

郵便の二倍値上、国鉄や煙草の五割値上、食品の大幅値上のニュースを聞いて、アメリカの学生達は「日本はきつと大暴動が起るだろう」と期待していた。だが資本主義の余恵に馴らされた日本人は、平穩そのものだったので、ガッカリしたという。

(その四)

アメリカでは黒白の人種差別は今なおひどいという。黒人が家を借りようとすると、契約済みだと体よくことわられたり、法外な家賃を吹かけられたりする。そこに、黒人に同情的な白人がまず交渉し、成立すると近くで待っていた黒人ができて契約する例がよくある。

「直接行動」読者会訪問記

4月8日東京・「住民ひろば」で開かれた読者会を訪問した。洋式和服を着てドッカとあぐらをかいた向井孝さんは裸電燈の下で興行の出来具合を団員と話しあう。さしづめ座長の様子だった。隣に坐る水田ふうさんの赤

い服装が色どりを添えている。私が入って会釈をすると、ハ来たかVという感じが返って来た。それは決して嫌味や困ったというのではなく、かと言って通り一遍のよく来たねといういたわりでもない。向井さんのいう自己否定的自由連合で、異質のものを異質と認めた上で、連合する所は連合しようという表現なのだろう。重ねて言うが夜十時にハネるまで坐り心地は悪くなかった。型どおり自己紹介を兼ねた活動報告が一廻りまわって、雑誌「直接行動」の感想、批評を述べる段になった。司会は石川玄さんである。指名された私はリベルテールサロンであつた意見として、非暴力と直接行動はどのように結びつくのか非暴力は無抵抗主義とどう違うのか、WRIは非暴力行動の(Non-Violent Action)というが、直接行動は以前だと「坐りこみ」「ゼネスト」などを指したが、現在ではむしろ代替の何らかの活動を指す。例えば肉屋が不当利益をあげているなら、消費者が対抗して、牛を飼育し、直販所を設けるのは直接行動と言われている。WRIの非暴力行動ではやはり反戦デモ、徴兵反対デモ、坐りこみ等と思うが、非暴力直接行動ではどのようになるのかと訊ねた。向井さんの回答は非暴力と直接行動は不可分である。非暴力は暴力のない状態を指すものである。ハそれなら非暴力ではなく無暴力ではないか？

と質問したV因ってその非暴力の状態をめざしての行動が非暴力直接行動である。詳しくは「暴力論ノート」を見て欲しいとの言葉であった。次ぎに革命時にハカマの人間と連帯するVと言うのは知識人のイマジネーション（想像）による思い入れではないか。向井さんも言う通りハカマの人間V必ずしも革命的でないといえれば、それでもなお最低辺履とどうして連帯するのか、向うではそうしたくないと言っている……とすれば……と質問した。向井さんの回答は、ベ平連の運動も自己肯定的であったが効果が少なかった。今、自分はこの運動に自己否定的にかかわっていると述べた。そこで自己否定的あなたとカマの人が否定的にあなたとの関りをもつのなら、そこに関係は成立しないのではないかと問うた。答えは東アジア反日武装戦線の獄中の人びともその父兄を通じて関係がもてるようになったのだから、自由連合は言葉だけでなく、活動によって状況が展開する……との確信を述べた。

向井さんにおいては理論と活動が交互に補充しあっている、都合の悪い所は理論で補い、理論の破たんは行動あるのみ式の号令だけでない所が良い。

リベルテール誌10月号の鈴木光一記名の論文について答弁した。リベルテール編集参加者としてはあの論説の不備を問うたが、編集の一人が敢て載せたものである。

リベルテールは本来、誰の寄稿でも載せるがその反論もあれば載せる。しかし、反論が本質に迫らずたゞお詫びやら、そうは言っていない、誤解だーを繰返すだけでは論議にならないので、鈴木君の反論はのせられず、見合わせていると話した。向井さんは、あれは何を言っているかよく判らない論文でしたが、リベルテールではもう一つ非暴力を論じたのがあって、周辺の人が反論したので、と経緯を語った。

散会前に石川君から現在やっている仕事としてハ宇宙人の聖書Vの著があり、獄中の奥崎謙三氏からの依頼で日刊紙並みの28頁に及ぶ新聞印刷に従っているとの報告があった。（はしもと・よしはる記）

一波万波

☆：古典的な幾多の同志が、毎年亡くなっていくのは致し方ないことですが、戦前は勿論、戦後に於ても、生活原理的に最も自由民衆的だと確信している思想が、何故庶民大衆から、民衆の生活意識の根底に根付かなかったのかと、自分自身の非力無能な虚無主義的行動の結果に対する反省自覚は別としても客観的には未だに日本人というものが不可解です。余りにも現世的というか、生

活の知恵の mammonism（金銭万能主義）そのもののような光鋭な働き egoism（利己主義）そのもののような唯物主義、驚嘆のほかありません。底辺労働者として、生存十数年、そして完全失業二年を越し厚生年金月6万円、晩年の久保さんが洩らした福祉社会の有難さが身に沁みる昨今です。……（本多盛宏さん）

☆三月の或る日、私は大逆事件の旧跡・愛知県大府を訪れました。別に何の目的もなかったのですが、六十数年前の十一月十日、この駅で宮下太吉が明治天皇を奉迎する群衆に向い、「天皇なんかは大したことはありません」と云いながら、内山愚童の『無政府共産』を配って歩きました。

私も大府駅のホームに立ち、「無政府共産」を掲げて記念写真を一枚——持っていた「無政府共産」の覆刻を二〇部、通学途中の学生に配ってみました。

さすがに「天皇なんか……」というのは声にならなかったのですが、受取った学生は、この駅にまつわる故事を知らなかったようです。（柏木隆法さんより）

〔八無政府共産Vの覆刻本と駅のホームでの写真一葉受取りました。有難うございました。愚童が地下出版したあの一冊は、タブーに挑戦してみるといいうような安易なものではなく、生きるぎりぎりの場での発言であり、

それこそフランス革命期の市民、ロシア革命のクロンシュタットの兵士達、ウクライナのマフノ党、中国五・四運動期の革命的庶民と共感する直接行動だったと思います。幸徳はその情念をハ基督抹殺論Vに結晶させたのでした。〕

☆：夫健助、存命中は一方ならぬ御高誼を賜りまして心より御礼申し上げます。……

癌という不治の病とは露知らず再起できるものと信じひたすら退院の日を念願しつつ、ついに不帰の客となつてしまいました。生者必滅、会者定離などと申しますが世の無情をひしひしと感じる今日、此頃でございます。生前書き残しましたものなどを取出しては、在りし日を忍んでおりますが、同封致しました払込票も文箱の中から出て参りました。きつと退院してから御送金申し上げる所存で書き込んでおいたものと存じ涙をあらたにいたしております。

書き残したかったものなども未完のまゝで残念でなりません……（山口一枝さんより）

〔八風雪を越えてVの著書がある労働運動の活動者山口健助さんの遺著は、近くご家族の配慮で出版される予定です。〕